

## 55. 「東華」の語の出典

問 仙台では「東華」という語を冠した名称がよくありますが、何から出たのでしょうか。「仙台事物起原考」（菊地勝之助）に東華堆朱の名称は『東北の華都仙台を象徴したその雅名をとったものである』<sup>(1)</sup>などと書かれていますが、どうも無理があるようで納得できないのです。

答 仙台には、華都などと称せられた実態もなかったし、詩文などでそのように表現された例もありませんので、東華の語は、決してそのような生まれ方をしたものではありません。

東華の語は、東華堆朱が出現するよりも遙か以前に、固定したものになっていました。旧藩時代に東華を雅号とした人物が、二三あったことは別として、確乎たる出所をもって用いられたのが、明治19年、富田鉄之助・松倉恂〔じゅん〕等が仙台清水小路に設立した東華学校の東華<sup>(2)</sup>であります。これは、当時の宮城県知事松平正直〔まさなお〕の命名で、大伴家持の歌

すめろぎの御代栄えむと東〔あずま〕<sup>(3)</sup>なる<sup>(4)</sup>  
みちのく山にくがね華〔はな〕<sup>(5)</sup>さく

から取ったものです。この事実を「富田鉄之助素描」（武田泰、「松の実」第21号（宮城県第二女子高等学校）の内）が次のように記しています。『宮城英学校（清水小路15番地、校長新島襄）は設立認可の下りた翌明治20年6月6日、校名を「東華学校」と改称し、仮理事会を東華義会と称することになり6月17日……開校式を挙行政した。県知事松平正直は、「東華」の名号が万葉集大伴家持作と伝えられる「すめろぎの御代栄えんと東なるみちのく山にこがね華さく」に由来する旨を説明し「この校や、ただに今日の祥瑞たるのみならず、将来無限の瑞祥を生み出すべき淵源といふもまた何の不可かこれ有らん」と前途を祝した。』。同様の記事が「東華義会及び東華女学校について」（本多繁「宮城学院中・高等学校紀要」第2集の内）にも見られます。東華学校の設立主体となった東華義会、その東華義会が、更にその後明治37年に設立した東華女学校の東華は同じ用例です。その後、深い意味も知らずに、甚しい場合は仙台の異称であるかのように勘違いして、仙台の商品名や、団体の名称に冠せられることが多くなりました。

注(1) 明治30年代に、宮城刑務所が収容者の工作指導者として新潟から招いた川崎栄之丞〔「仙台物産沿革」（山田揆一、「仙台叢書」別集2の内）には川崎康弘とある〕が、10余年の研究を重ねて開発した量産堆朱。堆朱は中国から室町時代頃伝来した漆芸で堆漆・彫漆といい、木地に漆を100回も塗重ね漆の厚い層を形成してこれに彫刻を施す工芸であるが、

この量産法は、木屑・石膏・漆を混合加熱し型板で朴の木地に圧着し一挙に速成するものである。大正初年商品化されたので、「大正堆朱」または「擬堆朱」と呼ばれた。「東華堆朱」の名称は、昭和3年刊「仙台遊覧の技折」（東北産業博覧会）、昭和9年刊「東北の物産」（仙台鉄道局運輸課）にも現われず、昭和11年向山越路に創業した東華堆朱工業株式会社が、これを商品名として売出したのに始まる。

注(2) 通称台輔また良助。晩香・文潭また九鳥村舎主人と号した。伊達慶邦に仕え、出入司となり、幕末多難な財政処理に当たった。戊辰戦争の際は、全力を尽して武器購入の大任を果たした。維新後、戦犯者として厳しく追究されたが、巧みに潜伏して免れ通した。後に許されて愛媛・岩手各県官吏を歴任し、明治11年仙台区が設置された時初代区長に任命された。老後は伊達家の家令となり、明治37年5月2日78才で歿した。新坂通永昌寺に葬る。

注(3) 字は子大、通称源太郎、稲香また松坪と号す。もと福井藩の重臣だった。明治11年、内務大書記官から宮城県令となり、在職14年、県治に尽した功績がきわめて顕著だった。貞山堀の堀削もその在任中の事業である。熊本県知事に転じ、内務次官に進み男爵を授けられた。内務省時代は、松方正義・松田道之とともに内務三松と称せられた逸材であった。後に枢密顧問官となり、大正4年4月20日歿、72才、青山墓地に葬る。

注(4) 奈良時代の貴族歌人。旅人の子。万葉集中歌数最も多く、その編者の一人に擬せられ、繊細幽寂な歌風は万葉後期を代表するものである。延暦4年〔785〕8月28日陸奥按察使〔あぜち〕兼鎮守将軍として多賀城に於て歿した。68才。物部氏と並んだ名門大伴氏は、家持の死とともに歴史上から消滅してしまった。

天平21年〔749〕陸奥国小田郡〔現在の宮城県遠田郡の東半部。産金地は遠田郡涌谷町黄金迫黄金山神社境内〕から大量産金があり、正月4日陸奥守百濟王敬福〔きょうふく〕が900両〔24銖〔しゅ〕を両〔小両〕とし、3両を大両、6両を斤と定めた大宝令の小両で換算すれば900両=3貫≒11.25Kg〕を献上した。これによって、一時頓挫を来していた聖武天皇畢生の悲願奈良東大寺の大仏塗金が果された。この感動的な黄金初出を慶祝して、4月14日元号を史上曾てない4字の天平感宝と改め、7月2日には再度天平勝宝と改められた。このような国家的昂奮を示す4字元号は、天平神護・神護景雲と引続き770年まで及んでいる。「すめらぎの御代栄えむと……」〔「万葉集」巻18の4097〕の歌は、天平感宝元年5月12日越中守として任地に在った32才の家持が、みちのくの大量産金を祝っての作である。佐久間洞巖の「奥羽観蹟聞老志」が、産金地を牡鹿郡金華山に充てているのは誤りで、金華山は地質上金を産しないことが明らかであるし、何等の資料も存在しない。黄金迫の天平産金を立証する資料に「黄金山神社志料」（佐々木敏雄編）があり、「陸奥国少田郡黄金山神社考」（沖安海、文化7）、「陸奥国遠田郡小田郡沿革考」（大槻文彦）「黄金迫の産金考証」（渡辺万次郎）、「我国最初の産金地」（小野田匡高）、「黄金山

神社出土の古瓦」(伊東信雄)その他有力な論考が収録されている。黄金山神社は式内社。

注(5) 東華学校は、明治25年3月末廃止され、校地校舎の一切を新設の宮城県尋常中学校〔初代校長大槻文彦、現宮城県第一高等学校の前身〕に譲渡した。生徒の編入も含む私立から公立への移譲であった。僅か5年の短命なこの学園から、山梨勝之進・児玉花外・真山青果など郷土の誇る俊秀が輩出した。37年、東華義会は宮城県尋常中学校が使用していた旧東華学校の施設が返還されたのを機会に東華女学校を設立した。41年東九番丁に移転した時東華学校本館が清水小路から移築された。大正10年、中島丁女子師範学校に併設されていた宮城県第二高等女学校が、東華女学校を吸収合併してこの地に移って来た。宮城県第二女子高等学校の前身である。同校の同窓会を「二華会」と称する。二は二女高、華は東華女学校の意味である。東華学校の歴史を刻む本館は整正典雅な洋風明治建築で、90年近い使用に堪えたが、破損甚しくなり取毀され、宮城県文化財保護協会が製作した模型が宮城県図書館に保存されている。また、清水小路の東華学校址〔現専売公社仙台支社構内〕に、昭和7年に卒業生が建てた同志社〔校長新島襄、東華学校の校長でもあった。〕出身徳富蘇峯撰文の由来碑がある。

資料 松の実第21号(宮城県第二女子高等学校)  
宮城学院中・高等学校紀要第2集

## 56. 皆鶴姫伝説のあるところ

問 宮城県内に、皆鶴姫伝説のある所があればそれはどこか。また、それらはどのような筋のものか。

答 皆鶴姫伝説のあるのは、本吉郡の気仙沼地方です。

皆鶴姫とは、勿論伝説上の人物で、軍記物の「義経記」〔ぎげいき〕に、父が秘蔵する兵法の書をひそかに持出して、これを所望していた牛若丸に手渡したため、父の怒りをかい、悲劇的な運命に身を果てる女性として描かれています。この皆鶴姫の後日譚が、各地に分布する義経伝説の中に、とりどりにローカル化されて登場してくる場合があります。義経伝説と一連のものですが、ことさらに取り立てるとき、これを皆鶴姫伝説といえるでしょう。

気仙沼地方に残っている皆鶴姫伝説にも幾通りかの筋があります。その一つは次のようなものです。皆鶴姫は、洛北の鞍馬寺別当鬼一法眼〔きいちほうげん〕の娘でした。牛若丸がこの鞍馬寺にあって、鬼一法眼が平家から預っている兵書「六韜三略」〔くりとうさんりゃく〕を、姫に持出させて手に入れました。程なく牛若丸は、金売吉次と共に平泉の藤原秀衡のもとに下って行きます。